

錦織監督

映画の現場から



20

価値観の転換期に贈る心の映画「渾身」①

正式発表の際に映画「渾身(こんしん)」の詳細が山陰の皆さんにも伝えられると思うが、少々フライング気味に、撮影日記風に現場のあれこれを書いていこうと思う。

まず、隠岐の皆さまに大感謝！ 言い表せないほどの協力を得て、映画に島の魂を吹き込んでいただいた。

今まで隠岐の島がロケ地となった映画やドラマの中で隠岐四島オールロケ、しかも全編が島の話というのは初めてだという。20人を超える俳優陣と地元キャストとの共演も実現。古典相撲を支える大中全会の皆さんの全面協力のおかげで主人公の取組を除き、すべて地元力士がガチンコで勝負してくれた。主人公と稽古(けいこ)するシーンも俳優顔負けの動じない演技でこなしてくれた。



隠岐全島オールロケ「渾身」撮影現場にて

隠岐全島オールロケ！ 人を虜にする食と風土

古典相撲はとても奥が深い。取材中、皆さんが熱く話してくださり、そのこだわりの強さにますます映画化したという思いが強くなった。

約10年前、いつか隠岐の古典相撲を題材に撮りたいと周りの人たちに話していた時、雲州ふらた映画祭の方から教えてもらったのが川上健一さんの同名小説。全編、隠岐相撲の小説だ。その小説を基に取材を重ねて脚本を書いた。

そして、スタッフは島に渡り、ロケ地を探すのだが、皆が様に驚きの声を上げた。こんなにいい島だったとは、と。某南の大リゾート島出身のスタッフが「観光客の数は比較にならないが、海の透明度や魚介類のうまさは隠岐の方がすごい」と一言。お世辞ではない。某南の大リゾート島も異国情緒があって良いところ。比較すること自体、ナンセンスだが、思わず比較して自然と食の両方で隠岐の虜(とりこ)になったスタッフも多かった。海の透明度！ 海の幸！ 島の周りが全部海という環境でミネラルたっぷりの草を食(は)んで育った牛までいる。「これ以上あまり知られてほしくない」(前出のスタッフ談) などという声も上がるほどだ。初めての隠岐島は想像を超えていたようだ。

今回の舞台となった隠岐一の宮、水若酢神社に遷宮相撲ならではの三重土俵を完全再現していただき、想像できない相撲シーンが撮れたと自負している。相撲の映画と聞いて、若い人は観(み)ないのでは、と思う人もいると思うが、それは先入観。若い人をも虜にする魅力がある。この欄で以前から何度も書いてきたように分かりやすく説明できないモノの中に本物がある。隠岐の島はいろいろな意味で想像を超えているのである。

(錦織良成・映画監督)

|| 第2、4金曜掲載 ||